国土学事始め

大石久和さん
国土技術研究センター理事長

空気のように当然の存在と思っている国土は、列島に人が住み始めた最初から、人の手によるいろいろな働きかけで、安全に住める領域を広げ、生産適地を拡大してきました。国土への働きかけが、安全に暮らせ、生産性を上げるなど国土からの恵みをもたらしたのです。国土への働きかけがなければ、国土からの恵沢はなく、恵沢の拡大もありません。

国土の特徴については小中学校時代から繰り返し学び、十分知っているつもりになっています。しかし社会資本を国土に展開することを考えたとき、経済的競争相手の世界各国と比較して、その特性を把握できているかとなると、はなはだ心許ない、と考えます。

軟弱地盤の状況、河川の流れ方、地震の有無など自然条件だけでなく、土地の保有形態や所有観なども他国と大きく相違し、国土の有効利用に大きなハンディを負っています。これをわが国の国際競争条件として理解していきたいと思います。

将来の国民のために今すべきこと

どの国も厳しい財政事情のなかで、将来の国民のため、安全に暮らせ、効率的に人や物が動き、快適に生きることが出来る国土造りに懸命の努力を続けています。わが国民だけがその努力を怠って、競争に勝てるはずがありません。そのためには〈国土形成の歴史〉や〈自然条件〉〈都市の成り立ち〉に加え、土地の所有観など〈社会条件〉について、他国と比較して把握しなければなりません。

私たちの国土環境は山林の自然風景に至るまで、先人たちの努力の成果で成り立っています。全く手つかずなのは白神山地などきわめてわずかです。私たちは、過去の人々の国土への働きかけという、困難で費用のかかる努力の結果に生きているのです。私たち世代だけがその外に立っていいはずがありません。

「公共事業」という言葉では、ストック形成のイメージを持ち得ず、これらのことを想起させることは出来ません。この言葉にダーティーなイメージを包み込んでおいて、この言葉で議論が可能だと考えるような浅い議論では、いま私たちがなすべきことは何かが抽出されません。

国土への働きかけが社会資本整備の本質であれば、国土への広い理解とイメージをもつ言葉が必要でしょう。「国土学」なる言葉で理解しなければ、と考えた訳はここにあるのです。

あすまや